道

michi

3

2023　No. 58

世界救世教　明主様と聖地に直結する会

甄

裁く勿れ

私はいつも信者にいっていることだが、アノ人は善だとか悪だとか、お邪魔になるとかならないとかといっている人もあるようだが、そういう人がまだ少しでもあるのは充分教えが徹底していないわけである。そうしてたびたびいう通り、人の善悪を云々(うんぬん)するのは、徹頭徹尾(てっとうてつび)神様の地位を冒(おか)すわけで、大いに間違っているから充分慎(つつし)んでもらいたいのである。それは勿論(もちろん)人間の分際として人の善悪などいささかも分かるはずもないからで分かるように思うのはまったく不知不識(しらずしらず)の内(うち)に慢心峠に上っているからである。したがってこういう人こそ、実は信仰の門口にも入っていない証拠である。また御経綸(ごけいりん)にしても人間の頭で分かるような、そんな浅いものではないので、この点も大いに心得ねばならないのである。なにしろ三千世界を救うというような、昔からまだないドエライ仕組なんだから、よほど大きな肚にならなければ、見当などつくはずはない。つまり小乗(しょうじょう)信仰の眼では、節穴から天井を覗(のぞ)くようなものである。

私は耳にタコのできるほど、小乗信仰ではいけない、大乗(だいじょう)信仰でなければ、神様の御心は分かるはずはないといっているが、どうも難しいとみえて、間違った人がまだあるのは困ったものである。ところが世間一般を見ても分かる通り、あらゆる面が小乗的であり、特に日本はそれがはなはだしいようである。信仰団体なども内部的に派閥(はばつ)を立て、勢力争いなどの醜態(しゅうたい)はときどき新聞を賑わしているし、その他、政党政派、官庁、会社等の内部にしても、ご多分に洩(も)れない有り様で、これらも能率や事業の発展に、悪影響をおよぼすのは勿論である。もっともそういう間違った世の中であればこそ、神様は立直しをなさるのである。そうしてこれらの根本(こんぽん)を検討してみると、ことごとく小乗なるがためであるから、どうしても大乗主義でなくては、とうてい明朗おおらかな社会は、実現するはずはないのである。

それだのに何ぞや、本教信者でありながら、世間並の小乗的考え方がまだ幾分(いくぶん)でも残っているとしたら早く気がつき、頭を切り替えて、本当の救世教信者になってもらいたいのである。そうでないとだんだん浄化が強くなるにつれて、神様の審判も厳しくなるから、いよいよとなって臍(ほぞ)を噛(か)んでも追っつかないから、改心するならいまの内といいたいのである。大本(おおもと)教のお筆先(ふでさき)に〝慢心と取り違いは大怪我(けが)の因(もと)であるぞよ〟という言葉が、繰り返し繰り返し出ているが、まったくその通りである。またキリストの〝汝(なんじ)人を裁く勿(なか)れ〟の一句も同様である。要するに人の善悪よりも自分の善悪を裁くことで、他人のことなどは無関心でいる方が本当である。(後略)

(「栄光」208号　昭和28年5月13日)

《目　次》

代表挨拶……4
感謝奉告①……11
感謝奉告②……13
感謝奉告③……14
三月度聖地行事・豊穣祈願祭……16
豊饒祈願の日……17
シリーズ明主様(2)家系……18
ブラジル信徒の信仰体験談……20
【21世紀を生きる】(6)……24
美術品紹介・お知らせ……26

表紙の写真　救世会館と桜

令和5年　課題

われよしの　心浄(きよ)めて　ひとよかれと
祈る心は　神に通へる

～明主様の示された「道」を求め、まっすぐ歩む～

代表挨拶

西村　正資

ありやかに　我眼(わがめ)に映(うつ)る神業(かみわざ)の
日(ひ)にいちぢるくなるぞ嬉(うれ)しき

（昭和二六年九月二三日　明主様詠）

夜明けが少しずつ早くなり、気づけば既に三月半ば、昼と夜の長さが同じになる「春分の日」を間近かにしています。

社会では年度替わり、そしてお子様にとっては進級、進学等で、皆様多忙な日々をお過ごしではないでしょうか。

三月一日、聖地では恒例の「豊穣祈願祭」が執り行われ、実りの秋に向けて、作物の種子をお供えし、その健やかな成長を祈願させていただきました。

私達にとりましても、大切な人生の種まきの時を迎えているのではないかと感じています。

箱根『観山亭』屋根修復への参画に奇蹟

ここで皆様にご報告を申し上げ、感謝と共にその喜びとお徳をぜひ分かち合いたい、そのような嬉しいことがありました。

先月の機関誌でもお伝えしました「『観山亭』屋根修復に参画」の記事に関わることです。

私達は、「聖地直結の会」として五年前に発足以来、包括世界救世教役員会の中に、当会との窓口をお定めいただき、毎月定例連絡会を開催しております。一月三一日、今年最初の会合の場で「実は、一三日に強い季節風が吹き荒れ、箱根観山亭の屋根の一部が吹き飛びました。その後専門家に診断していただいたところ、老朽化が想像以上に進んでいて大変なんです」という話を伺いました。私は大きなショックを受けました。

それは、令和元年の秋、皆様にお届けした資料「米六

俵」に示された先達の赤誠と奇蹟の記録を思い出したからです。

「米六俵」の奇蹟

昭和二一年、明主様は地上天国の雛型を建設されるということで、箱根に観山亭の建設を急がれていました。しかし、戦後の物資不足の中、金銭より白米を提供しないと職人が集まらなく、それが底をつき、明主様はついに建設の中止を決断されます。

その直後、明主様の記録によれば

『すると不思議なるかな、突如として一信者が、白米六俵をトラックに積んで来て寄贈されたのである。私はハハア神様は工事を中止してはいけないという思召しだなと思って、工事は休むことなくそのまま続行し、二一年八月出来上がったのが今の観山亭である』とあります。

その鍵となる米がどのように運ばれたのか。それを記したのが「米六俵」でした。その記録から〝地上天国の雛型が完成しなければ、この世に天国は到来しない〟と危機感を持った先達たちの命を懸けた取り組みがあって、お届けされたお米であることが判明したのです。

明主様の窮状を知った先達が声を掛け合い資金を集めました。闇米業者でさえ一俵がやっとと言われる時代に奇蹟的に六俵の米が手に入りました。しかし横浜から箱根まで検問を通過しトラックで運ぶことが最大の難題でした。信徒の中に浄霊で救われ、いつか明主様にご恩返しをと表明していたトラック運転手が引き受け、もし、途中で摘発されたら、明主様にご迷惑がかかる。それを回避するのにどうするか。思案の結果、先達は運転手に「舌を噛み切って死んで下さい。そのことを知ったら私も同じように死ぬ覚悟です」と伝えると、信者は「先生よくぞ仰って下さいました。これで私の肚は決まりました」と。前年まで長い戦乱にあった日本ですから、命を懸けることには、躊躇なかったのかも知れません。

その後、緊迫の空気の中、トラックは全国でも一番検問の厳しい横浜、鎌倉、小田原を経由して、無事箱根に届けられました。

先達たちも一カ所に集まり、ひたすら祈願していました。そこに道中一度も検問にかかることなく〝無事到着〟の電話が入り、皆感動の涙を流したという記録でした。

景仰掲載『観山亭の屋根葺き』

また、『景仰』には、このような逸話が掲載されてい

ます。

昭和二一年、観山亭の屋根葺きがあと四〇～五〇㎝で終わるという時に、急に真黒な雲が現れ、雨が降ったら大変なことになると明主様に申し上げたところ、『**あと何分かかる？**』と問われ「四〇分です」と申し上げると『**そうか**』と仰って空を見上げられしばらくして『**これでよろしい。早く葺いてしまいなさい**』と。急いで全部を葺き終わり、梯子を下りようとした時に、空から抜けるような凄い勢いで雨が降ってきたそうです。職人が後から気づいたのは、その時雨が降っていなかったのは、観山亭のまわりだけであったという奇蹟でした。

突然の誠のお届け

前記二つの逸話に触れ感動してきた私にとって、この度の屋根の一部が破損するとは一体どのような意味を持つのか。思わず考え込んでしまいましたが、神様のご意図や明主様のみ心が深く分かる訳もありません。

しかし、何をおいてもまずは早く修理して、明主様の天国建設に支障が出ないようにしなければならないとの思いで、当会に可能な精一杯のご献金を特別にお捧げさせていただきたいと、二月三日の定例役員会に諮りました。

役員会は一三時からでしたが、一一時頃ある信徒が聖地にご参拝になりました。そして、突然封筒を手渡され、「この感謝献金をお届けにきました」と仰います。中を確認させていただくと、何と役員会に観山亭修復のため提案する奉納金と全くの同額で、大変驚きました。私は明主様がお急ぎなのだと感じました。この修復事業に参加させていただくことは、七七年前に命を懸けた先達のご奉仕の誠に、時の隔たりを超えて、当会信徒も参加を許されるものと震える喜びを感じました。そしてすべては明主様がお見通しという緊張感で、この出来事を役員会に報告いたしました。

誠の連鎖反応

二月二一日に包括連絡会の場で、当会奉納金の実行とそれに伴う奇蹟の報告を申し上げようと準備していたところ、会議の一〇分前に先述した信徒から電話がありました。「先月ご献金させていただき、しばらくはお届けできないだろうと思っていましたが、その後また思わぬ入金がありました。やはり神様にお使いいただきたいと思い、送金させていただきます」との内容にまたビックリ。しかもその額を聞きましたら、何と前回と同じでした。それも包括連絡会の直前に掛かってきた電話でしたから、鳥肌がたちました。

私はかつて、同じような信徒に出会ったことがあります。関西のご婦人です。当時家庭の事情で「おひかり」をかけることが出来ず、「私には、ご浄霊を取り次ぐ御用ができないので、ご献金のご奉仕をさせていただきます」と、そこに信仰を賭けていらした方でした。不思議なことに、この方が大きな献金をされるとほぼ一ヶ月以内に同金額が臨時収入として入ってくるのです。「いややわぁ、この神さん、また返してきはったわ！」と言いながら、それもお届けに来られるのです。私の赴任中に4～5回ありました。この度も同様絵に描くような奇蹟の流れに、神様の深い仕組みと共に信仰の諭しを感じました。

また、私がこの原稿に向き合っている今、ある信徒から突然電話が入りました。「二月号の『道』を読み、観山亭修復に僅かですがご奉仕させていただきたい。どのようにしたらいいですか」との問い合わせです。冒頭の明主様のお歌を思い出し、まさに奇蹟の世界に包まれているような夢心地の真っただ中です。

私は一人では何もできませんが、当会に参集して下さった皆様の純粋な信仰と心を合わせれば、どんなことも可能になると思えてきました。そして明主様もお喜こび下さっているように感じています。当会「基本姿勢」に表した**『まず善人が団結し、連盟を作るのである』**という明主様のお言葉を思い出しています。

完全な観山亭修復にはとても及びませんが、皆様と共にご奉仕の一端に加えていただけること、ただただ感謝に堪えません。

『雛型』は、明主様の天国建設の霊的な要

明主様がはかられる地上天国の建設には、霊的力を有した『雛型』がどうしても必要なのだと、今更ながら勉強させていただきました。

私には、大きな錯覚があったように反省します。それは聖地が完成すれば〝それで良し〟ではないのだということです。よく考えれば分かりそうなことですが、つい気が抜け緩みが起きてしまうのです。天国の『雛型』は、そこを通して神様がご神業を行われるのですから、絶えず完全でなければならない訳です。多くの人の誠や祈りがいつの時代もそこに結集され、世界の闇を照らす光が輝いていなければならないのです。

また私には、天国の雛型が完成されたのに、何故それが早く世界に映し出されないのかと漠然と考える不遜な思いもありましたが、次のみ教えに答えが記載されていました。

『もしこの儘にして地上天国が来るとすれば、人類は洵に幸福であるが、新しき理想世界が建設されるというに就いては、その前に旧世界の清算がなくてはなら

ない訳である。丁度新しき家を建てんとするには旧き家を破壊し、土地を清浄化されなくてはならない。勿論旧き家にも役立つものは相当あろうから、それは残さるるであろう。その取捨選択は神がなし給う事は勿論である。故に人間は残されるもの、即ち新世界に役立つ者とならなければならない』

（「世界救世教とは何ぞや」昭和二九年八月二五日）

つまり、雛型が完成するということは、天国実現の一歩手前まで至ったということですが、同時に最後の天国社会完成の前に旧世界の破壊作業も強く表れるということでした。

また忘れてならないことは、そこに携わる〝明主様の信徒〟の魂も欠くことのできない大切な一部なのだということです。天国社会の主役は人間ですから、透き通る力強い輝きを放つ魂をいつも備えていて欲しいと期待されていることも、先のみ教えで強く諭されているように感じました。

厳しい世界情勢や生活環境に包まれていても〝未来世界のさきがけとして美しい天国人を目指しなさい〟〝自我や物欲は捨てなさい〟〝自分を大切にするように他を愛しなさい〟〝何があっても神様のお役に立ちたいと祈りなさい〟と諭されました。

すべては神の掌の中、目先に小さな欲を張り、手元から徳を落とすような人間になってはいけないと仲間の信仰に学びました。

機関誌『道』二月号の感謝奉告より学ぶ

一宮グループの、ＡＨさんは、信仰歴五六年になるそうです。ご両親の癌が信仰によって救われたのを目の当たりにし、医者嫌い薬嫌いとなったようですが、就職されたのは〝製薬会社〟だったそうです。皮肉のようにも思いますが、それも与えられ許された道ではないでしょうか。私のふるさと富山では、製薬会社の役員や全国を渡り歩き売薬を生業にする信徒が、数十人いらしたのを覚えています。その世界に携わる人が、薬の怖さを説くからこそみ教えの確かさもよく伝わりました。

通勤時に大事故に遭っても無事であり、加害者もまた製薬会社の方という奇蹟と奇縁を見せられ、将来明主様のお役に立たせるための修業をさせられていたように感じました。

この度、不思議なご縁で聖地直結の会に入会されてから、多くの信徒から信頼され、お世話の御用が生まれました。社会でも一つのものを創作するためには、設計に始まり、資材調達、基礎造り等から仕上げまで、様々な工程を多くの専門家が引き継ぎながら完成に至ります。安藤さんが、長年積み重ねてこられた人生経

験、それを生かした御用が、いよいよ始まったのではないでしょうか。人にはそれぞれ役割があります。明主様がご自分をどのようにお使いになるのか、それを別の目線で楽しみながら、日々御用奉仕に勤しんでいただきたいと思います。

愛媛グループのMTさんは、二年前の夏「熱中症」になり、厳しい症状がようやく治まりかけた頃に、今度は風邪を引き、それがきっかけで左耳に膿が溜まり今度はメニエルと診断されました。

その頃に聖地直結の会に入会され、しっかりご浄霊をいただき、み教えも拝読されるようになりました。結果、ここ数年熱を出すことが無くなっていたことに気づき、今回発熱し、一気に毒素が浄化され排泄が許されていると覚られたようです。

最初の水分不足からの熱中症などは、物理的不養生からの発生で注意しなければなりませんが、次の風邪からの発熱については、神様が私達の身体に備えて下さった生命力（浄化力）ではないでしょうか。MTさんもみ教えを拝読されるようになり「毒素が耳から出たんだ」と、そのことに気づかれています。

昔先生から「熱が出たらお赤飯を炊いてお祝いしなさい」と言われたのを思い出します。そのように覚ることができると心の不安も軽減するのですね。排膿が進み症状が軽くなると同時に家族間のトラブルも減り、すべてが好転することを感じていらっしゃいます。毒素が軽減すると、霊的〝くもり〟も軽減し、魂が輝きを取り戻し、結果運命が良くなるという、み教えの通りの奇蹟でした。

物事が良くなるための回り道、良くなるための一時的苦しみ、だから明主様は、世の中に不幸になる苦しみは本当は無く、すべて幸せになるための〝浄化作用である〟と表現されたのですね。

最後に報告されていますが〝仕事ができる、耳が聞こえる、家族が元気、そして、厳しい浄化を通して気づくことができること、すべてに感謝〟とされていますが、これが単に健康回復のみでなく、人格の成長ということに繋がったのでしょう。ありがとうございます。

東大阪グループ、MMさんは、夕方帰宅途中、足を踏み外して転倒、右胸を強打されました。通りがかりの方に助けられ、帰宅されましたが、その夜強い痛みに苦しみ、翌日レントゲンをとると、肋骨にひびが入っていることが分かりました。「三週間は痛みますよ」と宣告されたそうですが、その日から沢山の信者さんからご浄霊をいただき、一〇日程で痛みから解放されたようです。

ご浄霊と多くの仲間、ありがたいですね。尊いご浄霊も取り次ぎ者がいなければ、その恩恵にあずかることはできません。明主様が呼びかけられた〝善人は団結しなさい〟ということでもあります。多くの方が来て下さるのは、当然ながら、Mさんご自身、普段から団結のリーダーとして仲間のお世話に努力され、また、自宅を信者さんに開放し、御用にお使いいただいているからでしょう。普段の構えの大切さを感じます。また、このような機会を通して、周囲の方々に、ご浄霊を取り次ぐことの尊さや、誰でもその気になれば、神の奇蹟をいただくことが出来るのだということを、我が身のご守護を通して是非お伝え下さい。ひとりでも多く明主様のみ手足となる人を増やし、さらに団結して下さい。この度の骨折の痛みも、将来喜びとして必ずやMさんのもとに返ってくることでしょう。

皆様の誠のお姿に触れ、感謝奉告に学ばせていただくことで、私の心も明らかに神様のみ光に包まれ、気持ちよく、少々の不安があっても真っすぐ前を見つめて歩める安心立命の境地です。

厳しい社会の中で、そのことがどれだけ幸せなことかと、改めて感謝させていただきました。

四月一日は、『春季大祭』をお迎えいたします。

今年も大自然の恩恵に世界の人々が包まれることを祈念させていただきたいと思います。

皆様、共々に祈らせていただきましょう。

救世会館下の桜

感謝奉告 ①

感謝で歳を重ねていきたい

田川布教所　S　H

感謝祭おめでとうございます

今日こうして明主様へ日々いただく感動のご奉告を許されたことに感謝申し上げます。

所長先生より「抗がん剤治療をしなくていいと言われたことってすごい奇蹟よね」と、自分のことのように喜んでいただきました。

平成二九年二月胸腺腫という病名の珍しい病気が見つかり九州大学病院で手術を受けました。

みんな産まれてから持っていて、自分で免疫力がでたらそこで成長は止まってしまうそうですが、まれに成長し続ける人がいるそうです。その中に私もいて、ちょうど見つかった時は7センチになっていました。病気の事はよく分かりませんので、ただ説明を聞いて、深く考えることもできませんでしたが、「あばら骨を切り、胸を開いて手術をします。そばに心臓があるので」と言われ、この年になってこんな病気にめぐり合うなんてと、その時はなにも考えられませんでした。前日の夜ベットの上で自己浄霊、後は祈るだけの思いでした。

当日、主人と子供夫婦に見送られ手術室にいくのですが、車椅子が止まったんです。私は後ろを振り向かずに、どうしたのかな？と思ったら、肩をとんとんと叩く主人がいました。看護師さんも「よかったね、大丈夫よ」と優しく励まして見送ってくれました。一瞬のことでしたが、私にとっては忘れることができない大事な出来事でした。

術後、同じ看護師さんから、「手術も成功し、きれいにとれたので大丈夫」と言われ、とても安心しました。

それから一年、検診で右の肺に胸腺腫が転移しているということで、ペット検査、腹腔鏡手術、令和二年今度は左肺にいくつかの転移があり今度は抗がん剤治療になります。私はできればしたくないことを伝えました。

この先生との問答を二年間続けて、昨年変わって来られた先生に転院の希望をお願いしました。難しい病気なので、他ではできませんと拒まれましたが、「一応お願いしてみます」ということで受けていただき、飯塚病院での検査がはじまりました。やはり抗がん剤をすすめられました。前に手術を受けた九大と連絡もとったと思いますし、他の先生方とも話し合われたと思います。ただよく説明をしてくださるので納得がいきま

した。〝治療は嫌だけど何かしないと前には進まない。この病気になったのもなにか意味があるのかな？〟――「前向きに考えてみます」と先生に告げ、その説明を受ける予約の日の朝、気分が悪くめまいがしたので、日程を変更してもらうように電話しました。

それから改めて予約を取り直して行くと、研修で変わって来られた違う先生でした。「今迄の経過を見てもあまり変わっていないので、何回か自分も検査に関わりながら様子を見ていきたい。年齢もあり治療で弱ったらそのほうがきついですよね」と言ってくださり、すごく救われました。現在は検査を継続していくという状況です。このような浄化と関わり合いながらも、自分のこと、家庭のこと、人との出会い、ときどきお節介なことができることもご守護としか考えられません。いつも見守られているように感じます、以前の私だったら愚痴と心穏やかでない気持ちでいっぱいの日々を過ごしていたかもしれません。

当たり前のことですが、この頃は生活のなかで主人に「ありがとう」の言葉が多くなったことがすごく嬉しいです。

与えられた今回の浄化と大きなご守護、これから歩く人生に何か分かりませんが力をいただいた気がします。自分を見つめ直す機会だったのかもしれません。

いつ噴き出すか分からない感情の変化と、自分勝手なわがままな気持ちが沢山ある私には、明主様の信仰に出会わせていただいたことが一番のご守護だと思っています。

これからも今の自分に立ち返り「ありがとうございます」の気持ちで歳を重ねていきたいと願っております。

そして、これはまったくの蛇足ですが、今まで主人は、私が仕事に出る日は黙っているんですが、布教所参拝というと、だいたいあまりいい気持では送ってくれなかったのです。でもこの頃は、私が布教所に行くことをきちんと言えるようになり、今朝も、「きょう感謝祭に参らせてもらいますね」と告げたら、「分かった」と言います。主人は、今では布教所に気持ちよく行かせてくれるようになり、そういうことが、今の私には大きなご守護だと捉えることができ、深く感謝しています。

明主様、本当にありがとうございました。

感謝奉告 ②

日々感謝箱の実践が信仰継承に

東大阪グループ　ＮＭ

昨今、社会では何かと某団体の献金問題が物議を醸(かも)していますが、今度、そのようなモヤモヤを払拭するような快く爽やかな感謝箱によるご献金のご奉仕がありました。

取り組まれているのは私の信仰仲間のＮＴ氏の息子(四九歳)さんです。彼は、平成一一年に仕事の関係と結婚を機に名古屋に住むことになりました。当初は環境の変化、事業の経営にと忙しく過ごしていました。当然何時も順調という訳ではなく、年と共に公私にわたり浄化があったようです。その都度彼は彼の父に相談、お父様は何時も事業の事については的確な解答を与えていましたが、最後には必ず「全て浄化と受け止めて、祈りお任せする事が肝心だ」と教えていたそうです。当然、お父様も献金奉仕の実践によって、さまざまな浄化にご守護いただいてきた確固たる信念があるからで、その都度勇気づけられた事は、一度ならず何度もあったそうです。それがあって、感謝献金の実践を決意されたそうです。毎月布教所に参拝にも行けず、教費・感謝献金をお届けできず、お許しいただけなかったことを反省し、心を込めて感謝箱を継続されておられます。「〝今日も無事に過ごさしていただけた〟それに、〝父が私のことをいつも祈ってくれている〟と思うとポケットにある小銭を感謝箱に入れていました。その内に、やらないと何となく気持ちが悪く、感謝箱に気持ちを託すことで、その日一日気分すっきりとなってくるというのが、続けてこられた理由です」と言っておられました。

このように継続し実践できる環境は、やはりお父様の信仰姿勢を見ていらっしゃったと思います。お父様も毎月のご守護の御礼を積み立て奉納されておられます。信仰の継承がなされていると心強く思います。つつましくコツコツと実践されている姿が浮び、心洗われ、清々しさに心打たれました。

真心の結晶

感謝奉告 ③

自分を見つめ素直にみ教え実践

沼津グループ　T　E

二〇代の頃の話です。私は信仰三世です。

妹がMOA保育園に勤務していた頃、ある日、嬉しそうにしていたので、その姿を見て、私もそんな風になりたいと思いました。ご神前で妹になんでそんな風になれたのかを尋ねました。すると「明主様の話や信者さんから話を聞いて変わった」とのことでした。その時の私は素直に聞くことができました。み教えにもありますが、潜在意識の棒が邪魔しなかったのだと思います。

次の日の朝、洗濯物を干していて朝日を浴びた時、嬉しさが湧き起こってきました。それから何日間か嬉しいという気持ちが続きました。嫌なことを言われても、何とも思わなく、ただただ嬉しくて仕方がなく、ずっとニコニコしていました。今思うと天国の状態を味わわせていただけたのかなと思います。

それ以前の私はお参りもしない、み教え拝読もしたことがなかったのです。母が信仰継承を願い、明主様にご祈願していたそうで、母の願いが叶ったのだと思います。この時からお参りをするようになり、み教え拝読もするようになりました。

富士山を見ても何とも思わなかった私でしたが、富士山を美しいと思えるようになりました。山登りが嫌いな私でしたが、富士山に登りたいと思い、富士登山をしてご来光を拝むことができました。聖地にある草花や月や雪景色を見て美しいと感じるようになりました。今までは上司の方と話をするのも緊張していましたが、誰とでも同じように話せるようになりました。人前で何かをするのも恥ずかしかったのですが、「よさこい」を習い始め、人前で踊るのも楽しくなりました。絵画も習い、私は積極的になってきて、天国的な雰囲気の中で生活を楽しめるようになりました。

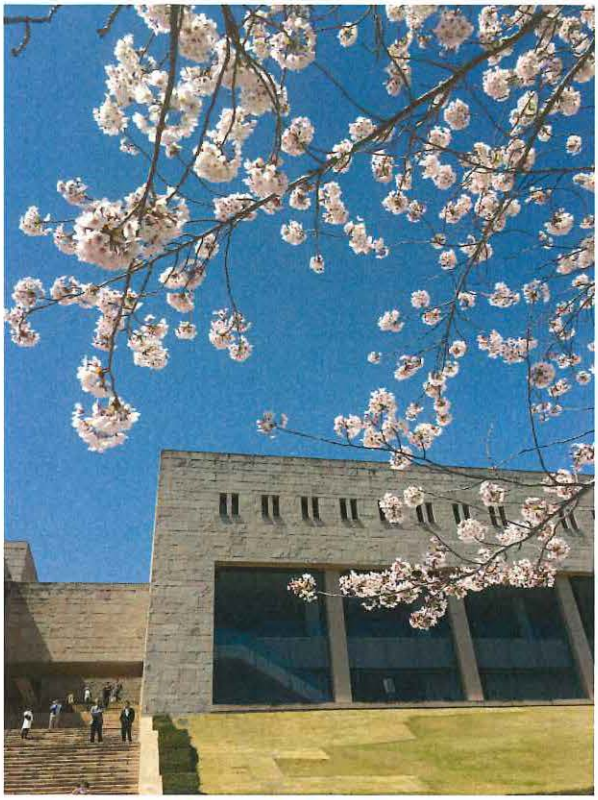
以前の自分は、髪を染めたり、必要以上の薬を使っていました。そのことをものすごく後悔しました。死んだら無ではないことを知ってから、〝これではいけない〟と思いました。そして、〝これから私はどうやって生きていけばよいのだろう〟と考えました。み教えにもありますが、この過去の犯した罪に打ち勝つには良いことを沢山しなくてはならないと思いました。それからの私は、髪を染めるのをやめ、薬を使うのもやめました。妹とゴミ拾いをするようになりました。友

達にも救世教を知ってもらいたいと思い、ＭＯＡ美術館にご案内したり、母から山月の基礎を教えてもらい花を生けるようになりました。

明主様のお導きと母のご祈願のお蔭で、明主様のみ教えにあるように、人生観が１８０度変わることができました。そこから明主様を一心に求め乗り越えてきました。今は一歩一歩、天国人となるために努力させていただいています。

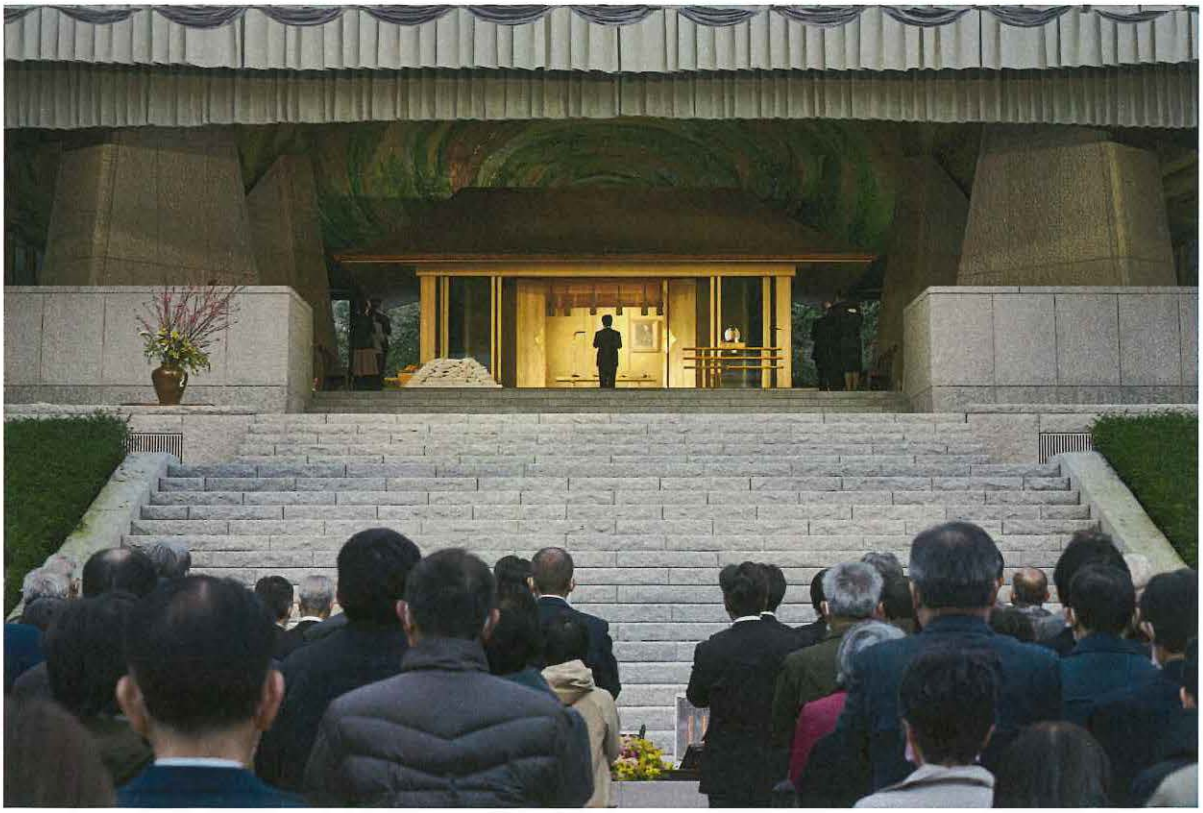
大神様、明主様、ご守護いただきありがとうございました。

”聖地の春”フォトだより



上・ＭＯＡ美術館ムアスクエア／中・瑞雲郷桜山／下・神仙郷富士見亭の雛飾り

うずたかく供えられた種子。豊饒を願う祈りが捧げられた



神仙郷完成から７０周年。「一木一草一石」に込められた明主様のみ心に思いを馳せ、御用奉仕の結集を誓う

三月の聖地行事　豊饒祈願の日（箱根）

五穀豊穣、自然農法の普及拡大と共に、紛争、感染症の終息、震災犠牲者への祈りが捧げられた

コロナ感染対策を講じながらの参拝ではあるが、活気ある祭典が戻りつつある

三月の聖地行事　豊穣祈願祭（熱海）

シリーズ　明主様(2)　〝家系〟

岡田家は教祖が誕生したころでこそ貧窮の底にあったが、明治の初めごろまでは、橋場からほど近い山谷浅草町に「武蔵屋」という屋号で代々「質屋」を営み、三十数軒の家作(貸家)もあって、大変富裕な家柄であった。(中略)

同家の菩提寺は、荒川区三河島にある清瀧山観音寺で、十一面観音を本尊とし、室町末期に創建された古刹として知られている。今もこの寺に残っている「過去帳」や「墓碑銘」によれば、江戸時代中期の宝永三年(一七〇六年)までの檀家の様子をさかのぼってうかがうことができる。幸いにも過去帳には、生前の名前とともに、住んでいた町の名を記しているから、それによって、文政の初め、すなわち、一八二〇年代に岡田家が山谷浅草町に移っていたことがわかる。

それ以前は、吉原揚屋町に住んで、同じ職業の質屋を営んでいたと考えられるのである。

記録に明記された家系で見る限り、代々の当主のうちで傑出した人物はといえば、教祖の曽祖父にあたる武蔵屋・喜左衛門をあげなければならない。

伝えによると、この人はきわめて義侠心が強く、人望も厚く、金に困っている者には、損得を抜きにして、それこそ安い利息で金を貸し与えたようである。また、予備の傘をたくさん用意しておき、雨降りの時、道行く人で困っている者に貸したりした。また、冬の寒い日には、しばしば粥などの炊き出しをして、人々に振る舞った。(中略)

菩提寺には、坊主頭で柔和な顔立ちの喜左衛門の写真が掛けてあったが、第二次世界大戦の空襲で焼失してしまったのは惜しまれる。曽祖父・喜左衛門はよほど教祖に似た性格をもっていたらしく、後年、教祖は妻・よ志に向かって、よく「私には曽祖父がついている。」と語ったというが、人並以上に深い愛の心は、三代後の教祖にそっくり受け継がれたのであり、血脈は争えぬという感がする。

喜左衛門は、男子の跡継ぎに恵まれなかったので、娘の家寿(教祖の祖母)に婿を迎えたのである。その婿という人は、旅の行きずりに、ふと武蔵屋へ立ち寄った人物であったが、一目ぼれで喜左衛門は、その人物が気に入り、婿として迎えるにいたったとしか伝えられていない。その人物の名前は古い戸籍には佐七とあるが、寺にある過去帳にはなぜか巳之助となっている。ところが、見込みに反し、さんざん道楽を重ねたので、このままでは身代が危うくなるという心配から、ついに勘当されてしまった。以来杳としてその行方がわからない。しかし、婿が家を出た時には、妻の家寿はすでに身籠っていた。やがて月満ちて生まれたのが教祖の父・喜三郎であった。時に嘉永五年(一八五二年)のことである。(中略)

喜左衛門の死去によって、大黒柱を失った武蔵屋は(中

略)、商売に不慣れな母の家寿にも、また、富裕な家の御曹子として育った喜三郎にも、物に対する目利きと評価を必要とする質屋という営業を支えていくには荷が重すぎた。そこで、それまで働いていた番頭を後見人にしたのだが、世は激動の時代であり、ひとたび翳(かげ)り始めた衰退の勢いをとどめることはできなかった。(中略)

明治四年(一八七一年)、二〇歳になった喜三郎は登里と結婚した。登里は里の旧姓を金山といい、現在の東京都葛飾区奥戸の生まれである。

登里の父は金山貞斎といい、信州(今の長野県)須坂の医師であった。母も同じ須坂の富沢家の娘・みせである。(中略)父、貞斎がこの世を去った時、次女の登里は六歳であった。あとに残された母親と三人の娘、女ばかりの四人家族にとって、身寄りもない土地で、幕末、維新の混乱期を生き抜いていくことは大変なことであったと思われる。娘時代に登里は和裁を習っていたが、それをもってしても、女の細腕で稼ぎ出せる金額は限られている。母娘四人は互いに励ましあいながら、か細い糸と針とによって必死に暮しをたてたようである。

喜三郎と結婚した時、登里は一八であった。一八歳のうら若い花嫁は、女手一つでこつこつと蓄えたお金の中から倹しい嫁入道具を整え、隅田川を舟で渡って、対岸の浅草の岡田家のもとへ嫁いで行った。当時岡田家は、まだそれなりの資産を残していたから、それは、つつましやかな中にも晴れやかな結婚の儀が催されたことと想像される。

しかし、二人の結婚とともに、それまで後見役をつとめていた番頭は店をやめたので、何代も続いた武蔵屋は自然廃業という形になってしまったのである。喜三郎はその後、古着屋、下駄屋と商売を変えたがどれも思わしくない。生活の困窮とともにいったんは橋場町一一六番地へ移り、その後さらに同じ町内の六三番地に住居を移している。こうして喜三郎は、最後に古道具屋を始めたのであった。教祖が生まれたのはそのころで、経済的にはどん底の時代であった。

しかし、貧しい生活の中にあっても、喜三郎の温厚な性格は変わらず、折り目正しい暮しぶりであった。また、妻の登里も、肚に一点のわだかまりも持たず、何事も心を平らにして、すべてをきちんと処理していた。何かよそから「戴いたもの」があった場合、それを包んであった風呂敷は必ず洗ったうえで火熨斗(ひのし)(現在のアイロンにあたる)をかけて返すというふうであった。また、後年、教祖は「父に叱られた記憶はない。」と話したと伝えられる。これらの端々から、父・喜三郎や母・登里の人柄を垣間見ることができる。夜遅くまで家族の着物を縫うのに精出している登里の働きぶりは、親戚の間にもいつしか評判となった。姉のかつは、妹の登里にどうかあやかるようにとの切なる願いを込めて、自分の孫娘に「とり」の音を生かして酉という名を付けたほどであった。(次号へ続く)　『東方之光』(上巻)より

ブラジル信徒の信仰体験談

大浄化を信仰で克服

ダニエレ・リベイロ・サントス（女性）

皆さん、おはようございます。私は救世教の家庭に生まれ育った、信仰二世です。両親は一九八三年に、私は九九年に「おひかり」の拝受が許されました。また、夫も信者です。

昨年、母が新型コロナウイルスに感染して重篤化するという大きな浄化をいただき、それをきっかけに自らの考えや行動が変わったという体験をいたしました。その体験について皆さんにお話したいと思います。

私は大学で作業療法を学び、現在は市の職員として社会扶助関連プロジェクトのメンタルヘルス部門で在宅ケアの仕事に携わっています。

ブラジルで新型コロナウイルスの感染拡大が始まった二〇二〇年三月からシフト勤務とオンライン診療を始めました。また不要不急の外出を控え、自宅で過ごす時間が増えた他、両親とは直接会わずにビデオチャットで会話をするようになるなど、私のライフスタイルは大きく変化しました。

連日、新型コロナ関連の報道が過熱するなか、社会不安が広がっていく様子が私の周辺でも伺えました。スーパーは必要以上の量を買いだめする人で溢れ、自宅マンションの窓から見下ろす道路は閑散としていて、街全体に不安感が漂っているのが分かりました。まるで映画のような風景、現実とは思えない日常に怯えながらも、私は「このパンデミックから何を学ぶべきなのか」と考えていました。

五四歳の母に新型コロナの症状が出始めたのは、そんな頃のことです。味覚と嗅覚を失い、全身の痛み、頭痛や咳といった症状が現れるようになったため、父が急患診療センターに母を連れて行きましたが、医師からはただ自宅待機を指示されただけで、薬も一切処方されませんでした。

しかしそれでも症状が改善しなかったため、数日後再び病院へ母を連れて行きました。そして医師の指示のもと受けた肺のCT検査で両肺の50%に異常を確認。〝新型コロナの可能性あり〟と診断され、抗生剤を処方されて自宅へと返されましたが、翌日になっても母の症状は良くなりませんでした。高熱と咳が続き、食欲もなく、倦怠感と強い不快症状にうなされたのです。

病院に戻りたくはありませんでしたが、かと言って自宅療養をこれ以上続けるわけにもいかず、四月二九日、母は入院することとなりました。母が入院した新型コロナウイルス感染患者専用病棟は面会が禁止されていたため、私たち家族はとても不安になりました。

そこでセンター長にご相談に行くと、先生は私たちを温かく迎えてくださり、神様にお委ねする大切さと御用奉仕を通じて霊の曇りを取り除く必要性についてお話しくださいました。そしてその後、皆で御神前へ行って明主様に現状をご奉告し、ご守護をお願いいたしました。

母の傍にいてあげられないことは辛かったものの、病床に置いてきた携帯電話で多少コミュニケーションを取ることはできました。

入院初日の症状は安定していましたが、翌晩は咳が止まらなかったため、より多くの酸素吸入を必要とし、当直医に診てもらわなければいけなかったようです。

母のそうした深刻な容態に胸を締め付けられながら、私は明主様のみ教えにお縋りしました。中でも特に『御神意を覚れ』の「善いことは無論結構だが、悪いことも浄化のためで、それが済めばよくなるに決っているから、ドッチへ転んでも結構」という一節は何度も繰り返し拝読しました。

私はこの浄化を魂の向上と心の洗浄に必要なプロセスと捉え、それに立ち向かう努力をしていきました。また、優しく世話好きで、奉仕の心に富んだ母に対して私たちが十分に気を配って来なかったこと、時々苛立つことさえあったことに気づかされてからは、母に愛してると言いたい、良い娘でなかったことを謝りたいと強く願うようになりました。

五月一日。「症状が悪化したため集中治療室で気管挿管されるようになった」という知らせに大きな衝撃を受けた私は、明主様にご守護いただけるよう祈り、翌日父と弟を連れてセンター長を訪ねました。

その日から私たち家族は浄霊やみ教えの拝読に加え、ＩｚｕｎｏｍｅＴＶで毎日配信される朝拝への参加や御玉串など、救世教の信仰実践を徹底するようになりました。またこの頃教会は閉鎖されていましたが、センター長から特別に許可をもらい、御力をいただくため教会の夕拝に毎晩出席しました。

浄化が大きい分、捧げる分もそれに比例して大きくなければいけない。そう肝に銘じつつ、全力で御用奉仕に励みました。そして祖霊様の年祭・慰霊祭を申し込み、教会と実家の両方で身魂磨きに取り組みました。また、神様が与えてくださった御力と精神的安定、そしてこの浄化に感謝しつつ、特別献金もさせていただきました。

一日に一度、医師が電話で母の容態を知らせてくれましたが、耳にするのはいつも「重篤な症状」という言葉でした。肺病変に加え、腎臓もかなりダメージを受けており、数日間排尿できずに血液透析を必要とするに至ったこともありました。加えて血圧も不安定でした。

こうして、医師からの連絡の内容が常に深刻なものばかりだったことから、私は〝この難局を耐え抜くにはみ教えにしがみついて、救世教の信仰実践を徹底していかなければいけない〟という思いを益々強くしていきました。

ＣＲＰ（炎症反応）検査を受けると、400mg／ℓを超える数値が検出され（正常値は6.0mg／ℓ以下）、肺の80％以上が炎症を起こし機能しなくなっていることが確認されました。私は頭がおかしくなりそうでした。母にまだ現界で使命があり、何とか回復する可能性があるなら、これからも私たちと共にいることを大神様、明主様がお許しくださるに違いない。けれど、もし使命が終わっていれば母は霊界へと旅立ち、そこで新しい歩みを始めるだろう。そう考えるようになりました。

ところで、いつだったか、浄霊センターで母と一緒に教区長とお会いしたことがあったのですが、そのとき先生は私の目をじっと見つめ、右手を強く握りしめながら「信仰で乗り越えましょう」と繰り返しおっしゃいました。

私は先生のこの言葉を、自分を鼓舞激励するスローガンとしました。そしてそれ以降、医師から容態の推移が報告されれば、その内容が如何なるものであれ、私はそれに感謝するようになりました。容態の推移が報告されるということは、母がもう一日生きるのを許されたことを意味すると考えたからです。

新型コロナウイルス感染症患者専用の集中治療室へ入って三六日が過ぎ、ようやく容態が少し安定したことで、母は面会が許可される一般集中治療室へと移されました。そしてそれ以降、母は浄霊をいただくことが可能となったため、私が毎日一時間以上、父も面会に行ったときは必ずお取り次ぎするようになりました。

御神業のお役に立つこと、執着心を拭うことに最大限の努力を払いましたが、常にそれが本当に「最大限」かどうかを疑い、深刻な浄化を前に「最大限の努力でも足りないんだ。限界を超えなければ」と何度も自分に言い聞かせました。

また、浄化をいただいている人たちの名簿を作ってセンターへ持って行き、御神前で毎日お祈りするという取り組みや、グァラピランガ聖地で執り行われる月次祭のオンライン参拝へ参加を呼び掛ける活動も一生懸命にさせていただきました。

それから数日が過ぎましたが、私は「信仰で乗り越えよう。毎日が勝利の日」というスローガンを胸に、様々な御用奉仕や信仰実践に励み続けました。

集中治療室に入って七〇日後、ようやく母が一般病棟へ移されたので皆で大喜びしました。一般病棟への移動は容態の回復と家族の付き添いが許可されたことを意味していたからです。

この頃、三〇日間の介護休暇を取得した私は、ほぼ二四時間母の傍にいることができたため、医療処置が施されている時間を除き何時間も続けて母にご浄霊をお取り次ぎしました。

母は次第に回復し、一般病棟に移ってから二二日後には退院することができました。計九二日三ヵ月にも及ぶ母の

入院は、心の転換と向上を図り、学びや内省を深め、信仰を確立し、お委ねや感謝の気持ちを養う機会を私たちに与えてくれました。

誰もがいつかこの世を去るこの浄化中何度もそう考え、重い病に罹らずに死について考えることの大切さを痛感しました。加えて、死は生の意味を一瞬にして変える力を持っていること、そして誰にも避けられないその運命に自分が備えていなかったことに気づかされました。

また、生命の有限性を目の当たりにしたことで、生きる意味をしっかりと考え、本当に大切なこと――家族に愛を伝えること、些細なことにも感謝すること、他人の幸福のために尽くすこと――も学ばせていただきました。

新型コロナウイルスの世界的大流行により、大勢の人が大切な家族や友人を失い、大きな悲しみと痛みを味わってきましたが、信仰の道を歩んでいけば、〝死も霊線を断ち切ることはできない〟ということが良く理解できるようになります。彼らは私たちの中で永遠に生き続けているのであって、体的に存在しないことが愛さなくなる理由にはならないのです。

おかげさまで、母は完治しました。現在、呼吸器系の後遺症もなく、運動能力や認知力にも全く問題はありません。腎機能も完全に回復し、血圧も安定しています。ヘモグロビン濃度もこれまでにないほどに改善されました。母は明主様より新しい命を授かったのです。

母を懸命に看護してくださった全ての医療従事者の方々、祈りを通じて大きな御光の輪を広げ、私たちがこの浄化を克服できるよう勇気づけてくださった方々に心から感謝を申し上げたいと思います。

また、幾度となく涙する私を優しく受け止め、支えてくれた夫にも感謝しなければいけません。

加えて、母を実母のように慕い、今度の浄化でも常に私たちの側にいてくれた私の三人の従姉妹たち（いずれも信者）にもお礼を言いたいと思います。

そして、私たち家族に信仰の道を歩むことをお許しくださり、御教えを通じて日々進歩向上していく力をお与えいただいた大神様と明主様には感謝の言葉もありません。ありがとうございました。

新連載『21世紀を生きる』（6）

「ゼロポイントフィールド仮説」は神さまの世界

高頭　和生

「ゼロポイントフィールド仮説」という言葉を聞いたことあるでしょうか。近年、量子科学の最先端の研究で明らかになっている事実とそれを前提とした仮説で、ひと言でいうと「神さまの世界を科学の分野が解明し始めた」ということです。量子科学の最先端では、この世界を司る全ての情報が宇宙全ての真空の中に存在し、宗教的に考えられてきた霊界や神の世界という目に見えない世界と重なるのです。量子力学というととても難しく思いますが、今回は田坂広志著の「死は存在しない」（光文社新書）をもとに、量子科学とは無縁であった小生が、自らの理解範囲で出来るかぎりわかりやすく書いていきたいと思います。

結論をいうと、私たちが明主様から教わっている、神さまの世界、魂の存在、死後の世界、霊層界、霊主体従の法則、祈りや想念の力、地上天国建設を目指す意味などが最先端の科学で立証される時代が来たということです。

著者の田坂広志氏は、原子力工学で博士号を得て国際会議でも委員を務めるといった、いわば唯物科学技術の第一人者であり、科学分野で影響力のある立場の方で、「死後の世界」や「目に見えない世界」は存在しないと信念をもった生き方をしていました。しかし、著者が人生において経験した「直観」や「以心伝心」、「予感」や「予知」といった不思議な体験を、現在の最先端の科学で理解していくと、「死は存在しない」と断言するまでの結論に至りました。身体は無くなっても意識は永遠にあり続けるということです。著者は「これまで数百年存在してきたとの間に横たわる深い谷間に、理性的な視点から橋を架け、21世紀における『科学』と『宗教』の融合を試みたいと考える」と本書で記しています。

ゼロポイントフィールド仮説（※小生の理解範囲なので、詳しくは著書をご覧ください）

唯物科学は一〇〇年以上、全て「物質」の性質をもつものを前提に研究されてきました。「物質」とは、目の前に明確に「存在」し、「質量」をもち、どこにあるか、という「位置」が明確であるものです。私たち人間もそうですし、野菜も、食器も、建物も、山も海も全てがそうです。目に見える全ての物質を細かく見ると、原子、さらに電子、陽子、中性子と解明されてきました。さらに細かく見ていくと「素粒子」という物質の最小単位までいきつきます。この素粒子の研究は近年加速的に進んでいます。「素粒子」のレベルでみると、「物質」という概念は消えていくそうです。素粒子には、膨大なエネルギーと情報が秘められており、全ての「物質」と言われるものの実態は、「波動」であり「エネルギー」であるということです。そして宇宙空間の全てに、無限の

エネルギー情報をもつ「量子真空」があることがわかってきました。

最先端の宇宙論は、「この宇宙は、一三八億年前に、『量子真空』から生まれた」とされています。その「量子真空」が、あるとき「ゆらぎ」を起こし、急速に膨張し、続いて大爆発を起こしてビッグバン宇宙を生み出し、この直後には、宇宙全体を「光子」(フォトン)で満たされたとされています。

これから現代の最先端科学が示している「仮説」になります。

この「量子真空」の中に「ゼロポイントフィールド」(以下「フィールド」)という場があり、そこには「この宇宙の全ての出来事の全ての情報が記録されている」と考えられています。この「量子真空」は宇宙に普遍的に存在します。「この宇宙の全ての出来事の全ての情報」とは、宇宙の誕生や太陽系の誕生、地球上の生き物の進化などの全ての情報。さらに私たち人間ひとり一人が、生まれてから死ぬまでの喜びや悲しみ、怪我や病気の体験、体の成長やその時々に考えていたことなど、全ての情報です。「そのような膨大な情報をどのように?」と思いますが、「波動干渉」を利用した「ホログラム原理」と書かれてありますが、ここでは割愛します。

聞きなれない言葉が続きましたが、簡単にいうと目に見える「物質世界」とは別に、全ての情報が蓄積されている「見えない世界が実在する」ことが仮説ではありますが科学の分野で定義されたということです。そして私たちの意識は、その「見えない世界」が主体で、そこから物質である人間が発生しており、「目に見える世界」の肉体が無くなっても「目に見えない世界」の意識は永遠であるということなのです。

ここからが本題になりますが、「フィールドには、過去と現在の情報だけでなく、未来の情報もある」ことや、「人間の意識はどのようにフィールドとつながるのか」、「現実世界と同時に深層世界が存在している」や「私たちの『意識の全ての情報』は、肉体の死後もフィールドに残り続ける」、「私たちの個別意識は宇宙意識から生まれた」ということなどなど、次々と興味深い話が続きます。

つづく

余談ですが、私はこの本を読み、「ゼロポイントフィールド」を「ゼロ=レイ=霊」、「フィールド=場≒界」とし、「ゼロポイントフィールド」=「霊界」、または「神霊界」と変換して捉えました。ぜひ「ゼロポイントフィールド」とインターネットで検索してみてください。多くの方々が解説をしていますが、時代が明主様のご教導にやっと追いついて来たことを感じることができると思います。

この連載は〝明主様を求める〟ひとつの切り口として紹介しています。会としてみ教え解釈の固定化を図る意図はありません。寛容にお読みいただければ幸いです。(編集者)

鍋島藩の直営になる鍋島焼は、わが国の諸窯の中でも最も精巧な磁器を生産し、今日なお声価が高い。なかでも本図のような桃花の図柄を扱った大皿は、色絵鍋島の精緻な技巧を遺憾なく発揮した名作として古来名高い。一般に尺皿といわれる大皿で、やや深い立ち上がりをもつ正円の皿に、高い高台がつき、透明性の白釉がかかっている。釉下に染付で、葉をつけた桃の実三個と、花をつけた桃の樹を描き、地に淡い呉須(ごす)を施している。桃の花と葉をつけた桃の実は、赤・黄・緑などの上絵付けで彩られている。桃の実は、染付の線描の上をなぞって赤で縁取りし、薄く染濃(そめだ)みをして陰影をつけ、左右の二個にはさらに赤で細かい点描を無数に打っている。皿の縁を白くくっきりと残しているのも鍋島らしい配慮で、裏面には三輪の花をもつ牡丹の折枝文を伸びやかに三方に配し、畳付(たたみつき)にかけてややすぼまった高台側面には七宝繋ぎ文をめぐらしている。

(MOA美術館・箱根美術館　名作美術品カレンダーより)

重要文化財　色絵桃花文皿　鍋島
江戸時代(17世紀末～18世紀初期)
MOA美術館所蔵

世界救世教　明主様と聖地に直結する会(聖地直結の会)

第三期執行部決まる

去る二月二八日、役員選考委員会において、左記の通り当会第三期役員が決定しました。

【役員】

西村　正資(代表責任役員)
門埜　敏春(責任役員)
今江　孝夫(責任役員)
太田　建男(理　事)
立石　　博(理　事)
吉原　佳予子(理　事)
大島　保男(監　事)
北林　　章(監　事)

世界救世教　明主様と聖地に直結する会
（聖地直結の会）
〒413-0006
熱海市桃山町26-1　救世会館１階
電話　0557　85　8060
FAX　0557　85　8185
seichicyokketsunokai@outlook.jp

子供の幸せと健康を祈って